慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	勝呂弘著 改訂新版 海上保険
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.11 (1955. 11) ,p.878(46)- 879(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19551101-0046
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551101-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

改訂新版『海上保險』

勝呂弘著

本書の著者勝呂弘博士は戰前久しく長崎高商教授として令名があり、「海上保險研究」（昭和十年）及び「保險學」（昭和十四年）の勞作を公刊して、その深遠な學識と篤實な學風とは夙に江湖に定評がある。太平洋戰爭中には召集せられて南方にあつたが、終戰復員の後には明治大學教授、續いて横濱國立大學教授となり、のち神戸大學教授に轉じて現在に至つている。

本書は著者自らいう通り、舊著「海上保險」（昭和二十五年）に對し、二年の歳月を費して加除改訂を加えたもので、理論體系においては舊著と異らないが、利益論、危險論、損害論のそれぞれの總說に當る部分については一段深く掘り下げたものであるが、單に外形からみて紙數を比較すれば、版組は同一で舊著は本文二百四十二頁、新著は本文四百七十八頁、新著は舊著の殆んど二倍に近く擴大せられているのみならず、内容においては格別の充實をみたのである。

著者の改訂增補の筆が精緻で、假令些細と思われる事についても決して疎略に扱わないことは、内外の參照文献等の略稱解について新舊兩者を對照してみてもその一端を窺い知ることが出來るが、新著の本文冒頭の第一編第一章は新稿であり、第二編海上被保險利益、第一章總說（四九～一三二頁）のうち最後の第八節を除いて、他は舊著（二一～三七頁）を全部改稿したもので、舊著における被保險利益の意義と題する一節は、新著においては被保險利益の意義、利益の實體に關する諸學說の吟味、被保險利益の主觀性、利益の保險可能性、被保險利益の種類、被保險利益の確定、複數利益の相互關係の七節に擴大して詳論せられる。そして舊著において著者は、被保險利益は人と物との關係とする關係說を採つていたが、新著においては財産財說または貨幣價値說を支持することを明かにしている。

同じようなことは第三編航海に關する危險、第一章總說（一六五～一八五頁）にもこれを見出すことが出來る。ここで新著は危險包括負擔の原則、危險の特定と因果關係の二節に分かれ、それは、舊著の保險契約上における危險の地位、海上保險者の負擔危險、因果關係の三節に相當するが、同一名稱の細目次においても論ずるところの内容は決して同一ではない。試みに危險包括負擔の原則（新著一六五頁～、舊著七八頁～）もしくは因果關係（新著一七五頁～、舊著八四頁～）を點檢すれば、その虛僞でないことが立ちどころに判明するであろう。

更に新著第四編（二六九～四七八頁）は舊著第三編（一八九～二四三頁）に相當するが、舊稿に新稿を添加增補して殆んど三倍に膨脹している。そしてそれは既に舊著において著者の本領として顯著であるように海上保險のあらゆる問題を細大洩さず採り上げて丹念に記述し論斷を加えているが、その明快透徹な論理と、中正妥當な論旨と、併せてアーノルド、テンプルマン、リッター、キッシュ、ブルックス、村瀨、加藤、小町谷、田中、今村、その他内外の諸權威の所說、法規、判例を以て補足する隨所の詳細周密な註釋とは、新著においても沒することの出來ない特徴で、初學の讀者の蒙を啓くと共に、專門學者の同意を促している。そして附錄の詳細な索引は一般の讀者を利することが少くない。

わが國においては海上保險の全般に亙る著書として世に定評のあるものに村瀨春雄、藤本幸太郎、加藤由作、椎名幾三郎、久川武三、その他の博士教授の勞作があるが、この新著はそれ等に伍して比類稀なる空前の大作と稱しても決して溢美ではないであろう。但しこの勞作もこれまでの多くの海上保險の著書と等しく形式的法律的範疇における研究に屬するものであることを附記しなくてはならない。（昭和三十年一月二十日刊、發行所株式會社春秋社、本文四七八頁、定價七八〇圓）

（園　乾治）

ロビンソン――ギルマン――ドゥニの勞働價値說に關する討論

Joan Robinson—Joseph M. Gillman—Henri Denis, "The Labor Theory of Value: A Discussion", in 'Science and Society,' Vol. XVIII, No. 2, Spring, 1954, pp. 141—167.

勞働價値說に關する論爭はじゆうらい屢々おこなわれてきたが、この討論の特徴は、同一號の誌上で近代經濟學を代表するロビンソンがまず勞働價値說を批判し、つぎにマルクス經濟學を代表するギルマンおよびドゥニがこれを批判するという形式をとつており、相互に超越的にではなく内在的に相手方の見解を克服しようとつとめている點である。私はなるべく忠實に三つの論文の内容を順々に紹介し、私自身のくわしい檢討は次の機會にゆずらせていただく。

一

ロビンソンの議論はいろいろの方面におよんでいるが、そのうちの重要な論點はつぎの如くである。

(一) 勞働價値說の討議は通常イデオロギーにくもらされておこなわれる。辯護者も批判者もともに問題の不充分な理解に立脚しがちである。とくに辯護者についていえば、彼等は自然的稀少物が價格にたいして影響を有することを否定したり（この點、後出のドゥニの批判參照）、價値を勞働時間の産物と定義することで單なる同義反復におちいつたりしている。價値論には二つの局面がある。一は經濟全體における利潤の賃金にたいする割合――搾取率――にかんするものである。一は特定諸商品の相對的價格にかんするものである。ロビンソンがこの論文であつかつているのは、第二の問題である旨、自らことわつている（p. 141.）。（ちなみに第一の問題につい